

室内楽の夕べ

1993年

平成5年3月13日(土)

午後7時

市川市文化会館小ホール

231th



市川市教育委員会 市川交響楽団協会 共催

プログラム

交響曲第1番 ニ長調 J.ハイドン
(1732-1809)

第1楽章 プレスト

第2楽章 アンダンテ

第3楽章 フィナーレ・プレスト

金管合奏

「トロンボーン四重奏の為の組曲」 F.ペータース

「吟遊詩人の為のソナタ」 作者不詳

————— 休 憇 —————

木管合奏

「木管五重奏曲 ト短調」 F.ダンツイ
(1763-1826)

弦楽合奏

弦楽セレナード ハ長調 作品48 P.チャイコフスキイ
(1840-1893)

第1楽章 アンダテ・ノン・トロッポ～アレグロ・モデラート

第2楽章 モデラート・テンポ・ディ・ワルツ

第3楽章 ラルゲット・エレジーコ「悲歌」

第4楽章 アンダンテ～アレグロ・コン・スピリット

指揮：山崎滋
演奏：市川交響楽団

本日の出演者

山 崎 滋〈指揮〉

東京生まれ。東京芸大指揮科に学び、指揮を金子登、佐藤功太郎、ピアノを村山信子、竹尾聰子、バイオリンを山岡耕作、スコア・リーディングをアンリエット=ピエイグ・ロジェ各氏に師事。在学中より二期会オペラのスタッフとして活躍し、若杉弘、小沢征爾両氏のアシスタントを努める一方、オペラ研究生スタジオの講師として後進の指導にもあたる。アマチュア団体との付き合いも多く筑波大学管弦楽団、東洋大学管弦楽団、東邦大学管弦楽団、横浜フィルハーモニー管弦楽団、合唱団「枇杷の会」の指揮を歴任。市響200回記念コンサートではベートーベンの第9交響曲の指揮を担当したが、今までにない良い演奏で、聴衆を感動させた。また長らくのあいだマタイ研究会の指揮をつとめており、バロック音楽は得意のレパートリーのひとつである。日本指揮者協会会員。

出演メンバー

第1バイオリン

生山 陽
鈴木 淳子
永田 匠
広浜 浩司
福原 祥子
松山 和子
村田いづみ
村田 康代
渡辺 昭子
渡辺えり子

第2バイオリン

石本 恵理
亀井 玲子
小島由美子
鈴木 薫
須永 恒雄
堤 哲児
二宮 伸雄
根守 弘和
久田しげ子
深沢 武夫
柳沢 敦子

ヴィオラ

斎藤十一郎
高橋 行継
星 乗昭
松山 俊子
村上 賢一
横田 行雄
若林 繁

チェロ

倉沢 由和
瀬川 清
田頭 扶
中村 公一
樋口 進
福原 耕二

コントラバス

菊池 克彦
鈴木 重則
村上 信乃
山木 和広
李 隆子

●ハイドン管楽器メンバー

オーボエ 荒井 淳
二村 直子
ファゴット 金沢 哲
ホルン 菅谷 博之
近藤 利昭

●金管合奏

トランペット 新井本昌宏
浅岡 幹晶
ホルン 藤井 茂司
トロンボーン 久保 昭
糸 秀樹
楣谷 妙絵
藪崎 裕至

●木管合奏

フルート 木村 純一
オーボエ 荒井 淳
クラリネット 吉野 智久
ファゴット 金坂 哲
ホルン 鳴村 恒夫

曲 目 解 説

交響曲第1番ニ短調

F.ハイドン (1732-1809)

一昨年の「第94番・驚愕」、昨年の「第104番・ロンドン」に続いて3回連続の室内楽公演でのハイドン交響曲ですが、今回は前期の作品のなかで「第1番」をとりあげました。

編成は弦楽5部にオーボエ、ホルン各2本ずつと通奏低音のファゴットで急・緩・急の3楽章形式から考えても、バロック時代のオペラの間奏曲から発展したと言われている初期の交響曲(シンフォニア)の基本的なスタイルとなっています。

ハイドンは27才(1759)の時に作曲したこの「第1番」から1795年に作曲した最後の「第104番・ロンドン」までの作品の中で、現在の交響曲の基本となる様式を確立し後世に「交響曲の父」と呼ばれるようになります。

普段はあまり聴くことのないめずらしい曲ですが、いきなり始まるプレストの第1楽章でバロック曲よりもう少し近代的な響きが、聴こえてくることだと思います。

第1楽章 プレスト ニ長調 4/4拍子

第2楽章 アンダンテ ト長調 2/4拍子

第3楽章 フィナーレ ニ長調 3/8拍子

演奏時間約12分

● 金管合奏

「4本のトロンボーンの為の組曲」より…

ペータース

作曲されたのは、そう古い事ではないのですけれどトロンボーン四重奏としては、もはや古典の部類に入ろうかと言うくらい、トロンボーン吹きでは、知らぬ人が無い曲でありまして、それだけに下手に演奏する訳にはいかないところなのですが、果たして…?

「吟遊詩人の為のソナタ」

作者不詳

この曲も金管五重奏としては大変ポピュラーな曲です。この原曲名を直訳すれば確かに「吟遊詩人の…」となるのですが、何故か金管奏者一般には「へば詩人の為のソナタ」とよばれ、親しまれている曲です。曲自体は3分もかかるない程の小品なのですが、なかなか軽快に聴かせるのが難しく、演奏者のセンスが問われるところです。

● 木管合奏

「木管五重奏」 ト短調 作品56-2

F.ダンツイ (1763-1826)

フランツ・ダンツイ（独1763～1826）は木管五重奏を3曲ずつ3つ、計9曲書いた。同ジャンルでは、そのスタイルを確立した、ボヘミア出身のアントン・ライヒヤ（1770～1836）と並んで重要なレパートリーである。木管五重奏は普通フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルンの5人編成になるが、室内楽という枠の中ではマイナーな存在で、今日ではあまり盛んでない。かのアンサンブル・ウィーン＝ベルリンでさえ地元のフィルハーモニーホールを満員にすることは難しい。本日の臨時編成5人組（仮にアンサンブル・イチカワと呼ぼう）は、いったい何人のお客様に聴いていただけるだろうか…………？

第1楽章 アレグレット ト短調
第2楽章 アンダンテ・コン・モート 変ホ長調
第3楽章 メヌエット(アレグロ)～トリオ ト短調～ト長調
第4楽章 アレグロ ト短調～ト長調

● 弦楽合奏

セレナーデ ハ長調 作品48

P.チャイコフスキー (1840-1893)

音楽に感動するとは、どんな気持ちなのでしょうか。
その瞬間、世界中の誰を敵にまわしても、感動したと胸をはって言える。
その瞬間、体の一部がドキドキする。その瞬間、体の一部がゾクゾクする。
それが感動と呼べる瞬間ではないでしょうか。
その瞬間がいつやってくるかわかりません。
その瞬間、演奏する人たちと聴く人たちが一つになります。
どんなに有名なオーケストラであっても、感動できるとはかぎりません。
チャイコフスキーの弦楽セレナーデいわゆる「チャイコのゲンセレ」は、
10年前私に感動することを教えてくれた曲です。
今日の演奏会で、10年前の私と同様に一瞬でも感動していただければ幸いです。
この曲は、1880年チャイコフスキーが40才の時の作品です。

第1楽章 アンダンテ・ノン・トロッポ～アレグロ・モデラート
第2楽章 モデラート・テンポ・ディ・ワルツ
第3楽章 ラルゲット・エレジーコ「悲歌」
第4楽章 アンダンテ～アレグロ・コン・スピリット